

予見されてきた《大転換》が本格化する時代

— 「建築分野の中長期的なあり方に関する懇談会」を終えて—

座長 松村秀一

歴史的に見れば、21世紀に入る以前から予見されてきた建築界の《大転換》が、いよいよ広く社会で実感される段階に入り、政府だけでなく多くの関係者が問題意識を共有してその《大転換》に最善の向き合い方をしていくべき、そうした時期に今回の検討は行われた。

《大転換》の一つは、建築を次々に建てることによって人々の豊かな生活環境を築き上げていく時代が区切りを迎え、その成果たる有り余るばかりの建築ストックを、豊かな生活の場として十分に活用していくことが望まれる時代になったことである。主に建てることを前提としてきた法規範、産業編成、人材育成、技術体系、金融システム等は抜本的に見直し、ストック活用に軸足を置いたものに本格的に変えていく必要がある。また、目指すべき地域像や都市像についても、建てることで実現するのではなく、ストックの効果的な活用によって実現するものとして議論し或いは描出していく必要がある。

《大転換》の二つ目は、かつてない速度での少子化の進行と同時に団塊の世代が後期高齢者になり、生産年齢人口が急減するという異常事態の中で、ストック活用を中心とする建築行為の質的な向上を目指さねばならない時代になったことである。建築行為が本来持っている自己実現等の人間的な豊かさを粒立てながら、それぞれの職種の生産力を新技術で補完する方法を効果的に重ね、同時にストック活用において主体的な役割を發揮するであろう発注者や利用者をも含む関連人材のそれぞれが保有すべき能力を見極め、新たな人材像とその育成、活躍のあり方を具体的に構想する必要がある。

《大転換》の三つ目は、技術の向かう先が二極化し、その二つを有効に結び付けるといふ難題が人類に投げかけられ始めたことである。建築に引き寄せて言えば、一つは新築時から解体時まで、自然の大きな循環の中に建築を適合させるための技術を目指す方向であり、今一つは人間の能力を代替するAIやロボット等の人工物技術の適用を建築の設計、施工、運用等の場面で加速度的に進める方向である。相互に交わることなく、人類を異なる地点に導く可能性のあるこの二つの方向の技術を、建築分野において注意深く追求しながら、相互に矛盾のない形で社会に実装していく必要がある。

今回の懇談会では、以上述べた《大転換》の本格化という時代認識の上に立ち、建築の多様な側面から想起される具体的な論点をできる限り抜けのない形で整理し提示すること、それを心掛けた。今後様々な関係者が未来に向けた行動を企てる際に、この検討結果がしっかりとした足場になることを願い、大いに期待している。